国際会議と雑感

下　村　波　基
岐阜工業高等専門学校

海洋及び極地工学に関する国際学会（ISOPE）の第1回国際会議がスコットランドの古都エディンバラで8月 11～16 日に開催されました．国際会議は，会場となった Heriot-Watt 大学の学長による「技術の教育への効果」と題しての講演で始まりました．その講演では，コンピューターテクノロジーと教育とのかかわりに視点を置き，虚と実，同時性と非同時性，受動と能動と対比させ，数年後，次世代そして次世紀での教育のあり方と展望を熱っぽく語ってくれました．

この国際学会の第1回目ということにもかかわらず 30 余りの国々からの参加があり，各会場とも活気が溢れていました．私は，材料に関するセッションで高力ボルトの遅れ破壊に関する拙論をつたない英語で発表させてもらいました．ここでの内容は，文部省から平成元年度からの2年間研究助成していただいた研究成果の一部を公表しました．建築鋼構造の分野でも SM50 を超える高性能鋼使用の機運のなか高力ボルトの高強度化は避けて通れない課題であります．発表後の質問では，この分野でのエキスパートらしい質問にたじたじとなってしまったのも事実です．ベルリンの壁は取り払われましたが，私も早く「言葉の壁」を取り除くべく努力したいと思います．

さて，会場となったこの大学は，起伏に富んだ地形をうまく利用して，自然環境にうまくとけ込んだ形態をとっておりました．連続した小さな丘の上に学科棟が建ち，講義室・福利厚生施設が谷を渡る橋のようにそれらをつないでいました．従って，今回発表用の講義室も地形を利用した階段状となっており，建築計画学に見てキャンパス計画がうまくなされているのに感心しました．敷地内には，雑木林や池がそのまま生かされ水鳥達がそこで生活している姿を見ると，殺伐とした風景しか思い起こせない学校にしか通うことができなかったわが身を振り返るとき，我々の自然に対する考え方に何か欠如したものを感ぜざるを得ませんでした．

会議が開催されたエディンバラという古都はその昔スコットランドの首府であっただけあり，各地にその歴史をほうふつとさせる歴史的建造物を見ることができました．私は建築鉄骨構造をお粗末ながら糊口の資としている身分ではありますが，そんな建造物には少なからず心を動かされます．街中を東西に巨大な岩脈が貫きその上に築かれた堅固な城塞は，イングランドとの抗戦と併合の歴史を象徴しているかのようでした．その岩脈に沿って Old town の町並みが続き，教会そして住居の中に入るとそれはまさに中世の時代にタイムスリップしたかの感がありました．

国際会議の会期中はエディンバラフェスティバルの会期中でもあったため，外国人観光客が町中を席巻し日本人も多く見受けることができました．その多くは，二十歳そこそこのいわゆる OL または女子学生のグループで「ウッソー」，「スッゴーイ」と嬉々としている姿に経済大国日本が産んだ歪んだ泡沫の一粒とその表面から発せられる偏った光を見る思いでした．

最後に，本会議への出席には第 15 回日向方斉学術振興交付金による御援助をいただいたことを付記します．